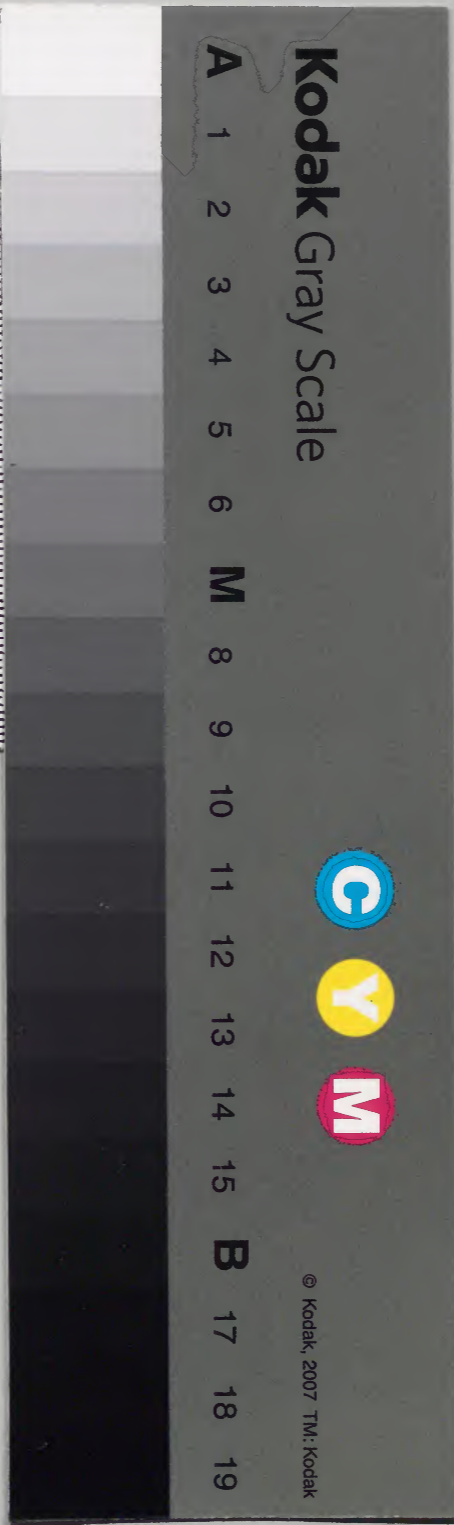


武家名目抄
職名部四之三
同四
八九

			一六四二五	和書門
二七	四〇	三〇	二七	類
冊	架	函	號	

庫	文	閣	內	
一五		一六		和
函	二七	四二	五	書
一五	冊	號	類	
架				

內閣文庫	
番號	和 16425
冊數	27 (5)
函號	153 277



武家名目抄第八冊

職名部四之三

管領



旅宿問答云守邦將軍御時元弘三年庚寅
五月足利治部大輔尊氏出世之時北條氏
末孫平高時又遣代云天下大機心切二

管領之時守邦將軍尊氏之京師之兩家

行也其時之兩管領以相讓守高時



管領

管領代

武家名目抄第八冊

淺草文庫



職名部四之三
管領
旅宿問答云守邦將軍御時元弘三年癸酉

五月足利治部大輔尊氏出世
末孫平高時又追伐之天下又被
位尼時ヨリ守邦迄ハ關東モ京都モ兩奉
行也其時ハ兩管領ハ相換守高時ハ

右馬頭茂時也元弘三年五月十八日高時

於山内自害之茂時ハ廿二日於殿中自殺

不此時東一變之テ成却當家ノ代按け書ハ永正中此

選述よりて高時を以て遠くといへども徳舍れ執権を

以て後領と稱せしむるは必ずしも後なることあり

依りて云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

上杉系圖云朝定左近將監彈正少弼法名

道禪與師直兩管領於信州却原御陣討死

太平記云妙吉侍或時首楞嚴經ノ談義已

ニ畢テ異國本朝ノ物語ニ及ケル時吉侍

者左兵衛督ニ向テ被申ケルハ古モ今モ

人ノ代ヲ保子家ヲ失フ事ハ其内ノ執事

管領ノ善惡ニヨル事ニテ候今武藏守越師直

後守力振舞ニテハ世中静リ得ニトコソ

覺テ候ヘ云々按不書の記事不後領於管或ハ

改定て管と以他の諸書官ニ依りて毎條同異あり今皆

悉ク其意ヲ了准す



又云 左兵衛督欲 左兵衛督ハ師泰力大勢
ニテ上洛スル由聞給テ此者力心ヲトラ
テハ叶マシスカサハヤト被思ケレハ飯
尾修理進入道ヲ使ニテ武藏守カ行事萬
短才庸愚ノ事アル間暫ク世務ノ綺ヲ止
ル處ナリ自今後ハ越後守ヲ以テ管領ニ
居セシムル者ナリ政所以下ノ沙汰毎事
慇懃ニ沙汰セラルルヘシトソ委補セラレ

ケルニ年十三ノ平肥前守平朝日正日

又云 京軍 京中ノ合戦ハ如此數日ニ及テ

雌雄日々ニ替リ安否今ニアリト見エケ

レ共時ノ管領仁木左京大夫頼章ハ一度

モ桂川ヨリ東へ打越サス

若狭小今富名領主次方云細川お掻キ清氏 其時此天下此

和 文明三年九月廿七日ノ涉下向ミテ神宮寺ヲ

暫所府あり 康安元年九月廿七日ノ涉下

御評定始著座次第云延文三年十二月三

日御座西北座管領細川清氏朝臣佐渡判

官入道道譽云々

按高師直上杉朝定等持院殿の時、執事となり、後仁木頼章

細川清氏おほきさく、あはれ、神さるる、これ比ハ大く、
爰領といひ、くして執事とあり、稱せり故に詳なる事ハ
彼條にゆつてあり、は
爰領といひ、くして執事とあり、稱せり故に詳なる事ハ

執事補任次第云斯波義將康安二年七月

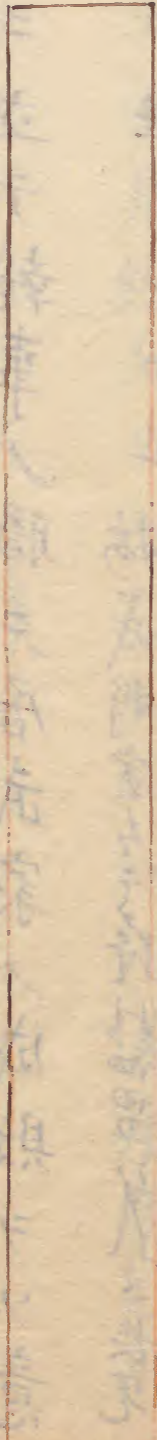
貞治元

補任至貞治五年五今年康暦元年再任至

明德二年十三今年明德四年六月五日補

任已上三今年度至應永五年六今年此時有

管領號



尊卑系脈云斯波義將左衛門佐右衛門督

治部大輔此時改執事號管領

太平記云神木入尾張修理大夫入道道朝

八將軍御兄弟合戦ノ時惠源禪門ノ方ニ

属シテ打負シカハ鬱胸ヲ散セス暫ハ宮
方ニ身ヲ寄ケルカ若將軍義詮朝臣ヨリ
様々幣礼ヲ盡シテ頻ニ招請シ給ヒケル
間亦御方ニ成テ三男治部大輔義将ヲ面
ニ立テ執事ノ職ニ居武家ノ成敗ヲソ意
ニ任ラレケル
按義将実々子経此四男ハ長兄
家長建長中自殺シテ放シ現左
次序をゆり
三男と書るなり
又云 諸大名讒高經 抑此管領職ト申ハ将
入道道朝條

軍家ニモ宗徒ノ一族也ケレハ誰カハ其
職ヲ猜ム人モ可有又關東ノ盛ナリシ世
ヲモ見給タリシ人ナレハ礼儀法度モサ
スカニ今ノ人ノ様ニハアルマシケレハ
是誠ニ武家ノ世ヲモ治メンスル人ヨト
覺ケルニ諸人ノ心ニ違フ事ノミアリテ
終ニ身ヲ被失ケルモ只春日大明神ノ冥
慮ナリト覺タリ諸人ノ心ニ違ケル事ハ

一ニハ近年日本國ノ地頭御家人ノ所領
ニ五十分一ノ武家役ヲ毎年懸ラレケル
ヲ此管領ノ時ニ二十分一ニナル是天下
ノ先例ニ非スト憤ヲ含ム所ナリ中懸ル
處ニ柳營庭前ノ花紅紫ノ色ヲ交ヘテ其
興類ナカリケレハ道朝種々ノ酒肴ヲ用
意シテ貞治五年三月四日ヲ點シ將軍ノ
御所ニテ花下ノ遊宴アルヘシト催サレ

殊更道譽佐木ニソ相觸ケル道譽兼テハ參ヘ
キ由領狀シタリケルカ態引違ヘテ京中
ノ道々ノ物ノ上手トモ一人モ殘ラズ皆
引具シテ大原野ノ花ノ本ニ宴ヲ設ケ席
ヲ糲テ世ニ類ナキ遊ヲソシタリケル此
遊洛中ノ口遊口ト成テ管領ノ方ヘ聞エ
ケレハ是ハ只我申沙汰スル將軍家ノ花
下ノ會ヲカハユケナル遊哉ト欺ケル者

也ト安カラヌ事ニソ被思ケル去是ハ
心中ノ憤ニテ公儀ニ可出咎ニモアラス
哀道譽何事ニテモ就公事犯法事アレカ
シ辛ク沙汰ヲ致サント心ヲ付テ被待ケ
ル處ニ二十分一ノ武家役ヲ道譽兩年マ
テ不沙汰間管領スハヤ究竟ノ罪科出來
ヌト悦テ道譽カ近年給リタリケル攝州
ノ守護職ヲ改メ同國ノ舊領多田莊ヲ没

収シテ政所料所ニソ成タリケル依之道
譽カ鬱憤不安如何ニモシテ此管領ヲ失
ハヤト思テ諸大名ヲ語フニ六角入道ハ
當家ノ惣領ナレハ無子細赤松ハ聳也ナ
シカハ可及異儀此外ノ大名共モ大畧ハ
道譽ニ不諂ト云者無リケレハ事ニ觸テ
此管領天下ノ世務ニ叶マシキ由ヲ將軍
家ヘソ讒シ申ケル

璫囊抄云施行管領ト申ハ近頃ノ事也本

ハ執事ト云キ大御所尊氏ノ御時高師直ノ朝

臣久ク此職ニアリシ執事ト號ス昔ハ高

上杉ノ人ノ役夕リキ近頃御一族ノ態ト

成テヨリ以來管領ト申也鹿苑院殿ノ御

代ノ初ッ方斯波修理大夫高經號靈源院
法名道朝

始テ此職ヲ承給時再三固辞シ給シカハ

只天下ヲ管領シテ御計候ヘト仰出サレ

シカハ領狀被申四男治部大輔義將ヲ以

テ此職ニ居給ト云貞治元後號法花寺法名道將

シ正四位下ニ叙セラル世ニ右衛門督ニ任

勘解由小路ノ金吾ト云是也然ルニ三男

左衛門佐氏頼ハ當家ニ彼職ニ居スル事

此家ノ瑕瑾也トテ出家遁世シ給ヒケル

ト云爰ニ或人ノ云世ノ風聞ハ今ノ如ク

ナレ共實ハ非尔高經ニ五童アリ嫡子家

長ハ陸奥守トシテ奥州ニ下向次男左京

大夫氏經ハ筑紫探題トシテ九州ニ下給
三男左衛門佐氏頼四男治部大輔義將五
男修理大夫義種也然兄二人无在京間氏
頼惣領タルヘキ歟ト思給又京極道譽禪
門智ニ取テモテナシケリ然共其器用有
ル故ニ親父義將ヲ以テ管領トシ惣領躰
タル間述懐ノ義ヲ以テ遁世シ給カ外聞
ヲ彼事ニ披露アリケルトナシ遂ニ江州

山上ノ邊ヲ菩提寺ニシテ圓寂ト云其ヨ
リ以降御一族職ト成テ管領ト申也關東
モ管領ト云共上杉一人此職也
按義將宝篋院殿の時執事職となす
貞治中父が執事となすよりて其職を止まされ唐院殿の時より
康暦中再が管領となすよりて其職は止まされ補佐せしむ
宝篋院殿の代なり本書唐院殿の代と記すハ僻事なり
但花学三代記を平記を身が脈考を合を考ふも管領中
稱して執事といふ事ありハ我が再任以後の事とす由
されハ本書に補佐のこころを管領と稱せしむるを混して記せし
又後醍醐記永享元年記及建内記永享元年の記
執事といふ事あり堂上此記録ハハおろそかに記せしむる也
執事補任次第云細川右馬頭頼之貞治六

年十一月補任應安元年四月十五日任武
藏守同四年十月廿四日轉相摸守同五年
辭之還任武州至康曆元年十三兮年
太平記云細河右馬頭自西國上洛條爰二細川右馬頭
賴之其頃西國ノ成敗ヲ司テ敵ヲ亡シ人
ヲ十ツケ諸事沙汰ノ途轍少シ先代貞永
貞應ノ舊規ニ相似タリト聞ケル間則天
下ノ管領職ニ令居御幼稚ノ若君ヲ可奉

輔佐卜群議同赴ニ定シカハ右馬頭賴之
ヲ武藏守ニ補任シテ執事職ヲ司ル
花營三代記云應安元年四月十五日左馬
頭殿御元服加冠細川右馬頭賴之于時管領今日
任武藏守當日御雜掌管領御劔役細川右馬助
御鎧御馬以下御太刀一振以吉見左京亮
被下管領云々三年四月九日御社參役人
次近習人々中次執事武州後陣侍所佐々

木治部少輔四年五月十九日夜武州號令
辭退管領職被赴西山西芳寺仍御所御出
并赤松律師坊以下相向之間武州自路次
被歸畢
空華日用工夫集云應安四年十二月十三
日京師清寢藏主至即出去月廿二日書書
日堂^當月十五日管領欲動春屋屋潛退雲居
菴而隱居于丹後州云：先是或人告京之

管領細川武州欲動春屋和尚和尚潛逃匿
于丹波州或云丹後未審其處
後愚昧記云應安四年四月一日知惠光院
邊騷動相尋之處土佐國住人佐川假名實
名不知
之居住伴寺中而執事為四國管領之間仰
可發向南方之由之處固辭之間為誅伐差
遣執事被管軍勢并侍所軍勢之處不能討
取之云々五年十月十三日高野莊事為催

促罷向管領許之處不達得

又云康曆元年二月廿日今夜世上騷動不

知何事巷說云執事賴之朝臣也諸大名等

可退治彼朝臣之結構等有之依之如此

五月三日是彼稱云武家執事事左衛門

佐號玉堂故修理大領狀此間治定了

花營三代記云康曆元年閏四月十四日以

二階堂中務少輔入道并松田丹後守為御

使可下國之由就被仰武州賴之即没落同十六

日自西宮乘船渡淡州之由有其聞武州於

京都出家云、廿八日左衛門佐義將可被

為管領之由被仰之按義將、再紀あり、凡家系法

書の記も亦あり、後を大し、

執事補任次第云武藏前司入道常久之賴明

德二年四月八日再任法躰任職之始也至

同三年二介年再任三介度ナリ

明德記云細川武蔵入道常久四國ヨリ押
渡テ備中國ヲ退治シテ翌年ニ上洛シニ
度管領職ニ居シ權勢万人ノ上ニ立テ天
下悉歸伏ス政道ハ每事武州禪門ニ讓卜
被仰下シカハ理民安世ノ議儀ヲ申沙汰シ
給ケリ
執事補任次第云畠山左衛門佐基國應永
五年八月五日補任至同十二年八按个年

山氏乃復候とあるハ
古事と始免候

又云斯波治部大輔義淳應永十六年八月
十日補任于時十一歳依為幼少祖父至同
十七年二个年
又云細川右京大夫満元應永十九年四月
十日補任至同廿八年七月廿九日上表十
个年按職と辭と我上表とあり世に
修治とあり
若校國今富名願之次身云小濱若岸ノ職

躬之公事自内裏可有直納之由依武家
被_二作_一之當法管領細川右京大夫及法教
書意永十九年十二月三日被_二出_一一色及了
伊勢家記云應永廿八年七月廿九日庚寅
管領細川右京大夫入_{滿元}道道觀管領職上表
納之蘇_{十一}建内記云正長元年十月十七日播州高家
莊直務并都多村及建聖院_五領賀茂莊加

地子等事申狀今朝付_{義淳}管領乞賦之處今日

雖為賦日依御出管領被共之間延引

又云永享元年七月十四日細川右京大夫_{持元}

故右京大夫入道道自去七日風病今日逝

觀男卅一歲前執事_{按持元之安似子補さけり了}去_{前執事とあるは道親をいふなり}

康富記云嘉吉二年八月四日壬辰先管領

細川右京大夫入_{持之}道常喜今日逝去四十三

歳也廿二日庚戌畠山左衛門督入道管領

職之出仕始也出立之儀衣袴也乘細代輿
立騎馬十人左右五番也淺十月十三日庚
棟黃直垂如常子管領畠山左衛門督入道雜訴之賦自今
日被出之飯尾六郎左衛門尉木澤左野等
三人談合書出日安之銘云：每月六今日
二可被出也今月二日管領衰日也去七日
七者飯尾違例也昨日又例日也仍自明日三
今日連日可被出之由風聞廿七日甲寅管

領畠山亭諸人為取雜訴賦群參賦更一日
不過廿通於所望之仁者及數百人之間每
日作闡廿賦所望之訴人兼令取之充人給書
賦云：此四五日如此云：此儀
元來無事也雖然為訴人殊勝
執事補任次第云細川右京大夫勝元文安
二年四月廿四日補任同六年四月十四日
武藏守同廿九日辭之京兆如元寶德元年
九月五日上表五今年四品依慈照院享德
殿御元服也

元年十二月廿三日再任至寬正五年十三

今年

康富記云文安四年五月十七日戊申或云仁

語云加賀國守護職事富樫次郎童名龜并

叔父高安高兩人半國充可知行之由管領之

沙汰落居云々此間相論不止度々合戰也

次郎者前管領畠山扶持也安高者當管領

細川京兆扶持也六年三月十八日先

年北野社御遷宮時畠山為管領職有執奏

長興宿祢被補官務畢其年中管領職替時

細川又為管領被執奏晨照宿祢還補莫至

今者也嗚呼正長之昔無官務吉凶之沙汰

者文安之今免兩職改易易之憂患孰出於尔

者飯于尔之謂乎然間自管領以使節攝津

飯肥禪可被尋究之由被申入傳奏又被申公

方武家云々於上意者堅被仰下之間及六七

度管領雖被支申遂以還補令治定云
又云寶德二年八月十六日丁亥畠山左衛
門督入道管領職事自去月上旬頃有上表
也悉被閣雜訴了近日被訴訟申之儀昨日
無為令落居云、仍今日如元為管領職之
御禮被出仕申者也八月十日今度大御所
無御子為繼母分不可有御輕服云、武家
管領右京大夫勝元被存此旨之故歟云

長祿以來申次記云正月上擧へ沙礼事云々
日之内云々三度朔日七日十五日也管領一人
上擧清前へ多事て此處に裁きて清敬えとら
う此四方云々
永友親基記云寛正六年十一月十日褰帳
典侍御訪英綾錦絢等代沙法分管領改御
訪五十八貫八百文上錦方丈代四十貫上
綾十二丈代十八貫五百文
按改長八畠山
尾張守なり

執事補任次第云細川勝元朝臣應仁二年

補任已上三至文明五年六年自文明五

年五月至同六年十二月職中絶按復領職之代、連續之

了にさしあはれ
始く中絶す

備前文明乱記云山名入道力威勢肩ヲ十

之並フル人十二時ニ大樹ノ管領細川右京

大夫勝元元來政長勲負タルニ依テ勝元

分國ノ勢ヲ呂上セ合戦ニ及フ事度也也

執事補任次第云畠山左衛門督政長文明

六年十二月十九日再任依御方御所義熙常德

院殿御元服之儀也同廿六日辞之至同九

年十二月又中絶九年十二月廿五日補任

已上三至同十八年十年

蜷川親元記云文明十五年五月廿七日東

山殿沛移造中管領 畠山左衛門督殿故 難

掌土肥六席右御門尉沛右刀光三千文云

云

執事補任次第云細川右京大夫政元文明
十八年七月廿日補任就常德院殿大將御
拜賀之儀也被奉當日計則上表也十九年
丙午當年改元長享八月再任依御吉書之儀也今
日被行御評定并御前御沙汰初則辭之其
後中絶

舟岡記云京管領細川右京大夫政元八四

十歳ノ頃マテ女人禁制ニテ魔法飯繩ノ
法ア夕コノ法ヲ行ヒサナカラ出家ノ如

ク山伏ノ如シ 按政元ハ職トウケアリナク一ロニ
マヤクモ當時主人ニ由ル

以て世に及ぶ事
著明にハシテ

謙倉大寺成云憲實とと謙倉ハ均系ト云由京
都より遷りし成氏と再ニ御使者キレトモ

後又系系伊豆國名越國法寺より出家ト云
カクモ遷りし後形々ト西至ハ卦周防國ハ

竹脚ありて安ふき以中國乃大内及威勢と中
國九州まゝくゆふいあれは武満細川島
山名三家ともふ末になりて家つとこと二つ
りこれ合戦あり一人して天下は清後見と辨
計大内と大名と威勢とありて天下の地
清見とて一度朝臣のりて公方の執事と
かき給ふを輔依とせん事然いふも三家の外
を執事乃例とかりかきつとて三年

字をそとく色とてき於時憲實入る此所へ来
りきあつと幸なれと大にきく憲實入るを雲
洞菴高岩長持菴と稱し長門と深川大
寧寺と中合下とふはしと馳走湯治と
則大内及ハ憲實乃忠子になり上杉山内の原
圖を縫心際丸まひ菴の幕れ紋と清く憲實
を清父とて崇敬派ありて後大内及朝へ上
り上杉と関東若殿の家ありハとてつきく

ノ末類ナラハ所領安堵アルヘキ也但ニ
重テ有罪ハ依時議可罰之又當代在忠先
代无忠侍ヲハ只今ノ忠ニ合テ可扶持之
也相構テミミ一毛一塵程モ無理無道
ノ儀不可有能ク守之ハ管領不守之ハ人
非人也

按管領といふ意はこと事をまかす
好いといふれおて正しき威名おもあは

定す所の不もなく一所の長官は稱し
た巻安堵年紀故巻奴婢雜人券契和与
状員累沓文等謀實礼明く爰領寄人右筆
奉行人等評判也なり人得差符方與奪
尚系仁者成書下下國々時々下奉書
而沙音々時下使節石文調訴陳状お對
尚所執事爰領を行人等

梅一本を爰領
のよま年々此字

ありては可致同善技嘉沙法就探題之
ハ誤なり也 可致同善技嘉沙法就探題之
吳見所加下知也 侍所之謀叛教害山海
あ賊強竊二盜放火刃傷打擲蹂躪勾引
路次狼藉闕障喧嘩等之管領執事等
人檢断之と注せし皆引討人をして
爰取之 引討も此して執権の人を引討
あはれは嘉元三代記に應安元年二月
十九日 祥律内侍始り 爰取依本大丈判官

入道と何ふも祥律方引討人乃事して
庭訓といふ由ふ若領も同し又諏訪大明神
畫詞に嘉元の比当國の家人小坂孫三郎
盛直重さ科有る硫黄も由一流されり
あらう當社に社山に酒室の頭役人なり
先規に任さるゝ免除何れも由無きべし
とて于此執権時村胡臣と越訴爰領宗方
確論の事ありて神新と云ふべし

ありては示す如く二書なるは後叙の同く
越前方引舟取人を以て家系なり又保曆
間記にありて是の時乃管領長湊入道老老に
依りて子息長湊石山に付て次男に被り給
を中身之と記し大平記長湊之を
室期條にも前相模也之時の若館に長湊
入道國直の嫡孫次郎之をまるといふなり
是れ長湊氏を世に北條家の家令として

陪臣にこそきく人を家系を以て後叙に
いふとある也又今川了俊書札に我々の
事と既九州に若館の時よりいふと
いふとあるなりとある後九州に標題する
時其事を云ふに利あるなりとあり
とあり一時の稱呼なりとあるなり
足利殿の時よりして執事之師並上杉
朝定に本頼章細川清氏などあり

管領とていふ一はとれ物とていふとて
程全く忠職名とていふは志とていふは斯波
義将執事とていふは及とていふは主職堂の
とていふは河家人とていふは及びのひら
執事とていふは名忠大名一家志老位也
同き以ていふは常とていふは管領と称する
とていふは斯波氏公方家一門に
申すとていふは多系連枝なれはありあれ

より後々斯波細川畠山畠山此三家河内
一門の系とていふは職と補きとて他門の
人覬覦れを絶よとていふは志とていふは
より世とていふは三家を三職とも三管領
ともいふは常とていふは管領とていふは
常といふ名を知人なきとていふは但常
といふ名をのこすといふは實とていふは執事
といふを義とす其といふは既とていふは
武家此成敗悉くは職とていふは威

天下の度りしを慈仁礼の後室町は家も
屋うやく衰微し管領家も亦陵夷
しりれハ孫も子職も尚りもも政務を
ふさめらむ力なくおのつうし關職となれり
但幕府もて申元彼お買等其大儀初も
時必若館の取役ありしとあるも白地
補きしれし其職数日よるふもれし一職れ
かく衰ししより大内依る本朝念ふ好

等のこもきし筋ありぬ家も時勢より
夫後見のつしを承る族もあまも
時く管領の号とゆきしれもハ一職を
轉せしれまなへし

管領代

伊勢家記云應永卅二年正月一日壬申梳
飯出仕有管領代出仕畠山彈正少弼持國
管領一男也 直垂大帷薄香 直垂紋 白扇 六
法名徳本 テウコ 骨

馬栗毛槽自大御所騎馬五番也

新撰應仁記云武衛家公方勢ハ尾張守ハ

合手ナレハ不及申廣川ト云所ニ陣ヲ取

惣大将管領代細川讚岐守成之同兵部少

輔勝久同淡路守成春同阿波守勝信同刑

部少輔勝吉山名彈正忠是豊武田大膳大

夫信賢弟治部少輔國信鷄飼望月關長野

伊勢國司勢モ被打立

三好記云京公方義晴公御子御年今年十

一歳ニテ御元服アリテ御家督御相續ア

ルヘシトテ天文十五年十一月中旬ニ御

沙汰アリ加冠ノ役ハ代々三管領ノ中當

職ノ役ナレトモ今細川畠山乱中ニテム

シユシノ最中ナリ若輩ナリ微力ナリ旁

御請難申カルヘシ幸ニ佐々木彈正少弼

定頼宿老ト云大名ナリ最其仁ニ相當レ

リ則管領代ニ比シ勤仕可申旨再三被仰
付ケル定頼大ニ恐レ辞退被申レトモ頻
リニ被仰付間且ハ家ノ面目ナリトテ御
請ヲソ被申ケル
光源院殿御元服記云天文十五丙午歲御
元服當日十二月十九日中表江御出有テ
有富有春御身固有之御次管領代定頼著座
衣装大帷子折烏帽子カケ緒紙ヨリ海老

鞘卷カヲサル也翌廿日御判始有之
御物七通ヲ硯ノ蓋ニ入伊勢守貞孝持參
シテ管領代定頼ニ渡サル云々
義秋公方記云佐々木定頼管領代ニ比シ
御加冠ニ參ラル其例トシテ義景ヲ管
領代ニ比セラレ御加冠ノ役勤仕アマツ
サヘ左衛門督ニ任セラル義景カ父教景
初テ御相伴衆ニ召加ラルトイヘトモ

御前伺候ハナクシテ只名ノミ計リナリ

シ云々 義景に敵方の相合あり
按、以て之條も亦都
物軍家ノ管代也

鎌倉年中行事云正月朔日ノ椀飯ハ管領ヨリ參遠侍ニハ高盛物ニアリ一ニハ波葉一ニハ鱸也置鳥置鯉アリ椀飯奉行直垂ニテ出仕是ハ右筆勤之管領代官ト兩人御中門ニ令伺候公方様出御奉待御座ハ妻戸ノ門也御酒式三献三献メハ御酌

御酒ヲ申時御一家ノ人銀劔持參管領御代官手ヨリ直ニ被受取也其後弓征矢ヲ役人持參其次ニ沓行騰ヲ役人持參イタシ罷出後管領被官武州守護代子或孫或兄弟等御車寄ノ立砂ノ前ニ御馬御鞍ヲ置テ引立同引副ハ裸馬ナリ 按、此一條ハ宮東
管領の仲友也
按管領代のつぎハ宮東
御前
何れも儀式の時或は出軍の時ありて由儀の

関職せしむ又も淳く事ありて其後より清い
難き事あり候之定むらむとのなき方り

一門たる輩れ勤むるも西後より天文永

禄の清ふ事りて古規きききしあふ依

依まぬ倉守の輩と云の事しりも其れを

新し也正月元日柳宮めく梳飯出仕乃或も

大等願する人取障あきりて事り

清くありひなき事聞東より代官と云く勤

勤仕せしむるを常の御とせむと云事も徳

倉守中より事ふん事りて事り

武家名目抄第八冊

關東管領 又稱鎌倉管領

武家名目抄第九冊

職名部四之四

關東管領 又稱鎌倉管領

太平記云 足利殿東國下向條 諸卿議奏有テ急足利

宰相高氏卿ヲ討手ニ下サルヘキニ定リ

ケリ則勅使ヲ以テ此由ヲ仰下サレケレ

ハ相公勅使ニ對シテ申サレケルハ去又

ル元弘ノ乱ノ始高氏御方ニ參セシニ依

テ天下ノ士卒皆官軍ニ属シテ勝事ヲ一
時ニ決シ候キ然ハ今一統ノ御代偏ニ高
氏カ武功ト云ヘシ抑征夷將軍ノ任ハ代
ニ源平ノ輩功ニ依テ其位ニ居スル例勝
テ計フヘカラス此一事殊ニ相ノ為家
為望ニ深キ所ナリ次ニハ乱ヲ鎮メ治ヲ
致ス以謀士卒有功時節ニ賞ヲ行フニシ
ツハナシ若注進ヲ經テ軍勢ノ忠否ヲ奏

聞セハ擧達道遠シテ忠戦ノ輩勇ヲ成ヘ
カラス然レハ指東ハ箇國ノ管領ヲ許サ
レ直ニ軍勢ノ恩賞ヲ執行フ様ニ勅裁ヲ
成下サレ夜ヲ日ニ繼テ罷下リテ朝敵ヲ
退治仕ルヘキニテ候若此兩條勅許ヲ蒙
スンハ關東征討ノ事他人ニ仰附ラルヘ
ク候トク申サレケル此兩條ハ天下治乱
ノ端ナレハ君モ能ク御思案アルヘカリ

ケルヲ申請ル旨ニ任テ左右ナク勅許有
ケルコソ始終如何トハ覺エケル但征夷
將軍ノ事ハ關東靜謐ノ忠ニ依ヘシ東ハ
箇國ノ管領ノ事ハ先子細有ヘカラスト
テ則綸旨ヲ成下サレケル是ノミナラス
忝モ天子ノ御諱ノ字ヲ下サレテ高氏ト
名ノラレケル高ノ字ヲ改メテ尊ノ字ニ
ソ成サレケル

又云

新田是利確
物奏狀條

是利宰相尊氏卿ハ相摸

次郎時行ヲ退治シテ東國廳ヲ靜謐シヌ
レハ勅約ノ上ハ何ノ子細カ可有トテ未
夕宣言ヲモ下サレサルニ押テ是利征夷
將軍トソ申ケル東ハ箇國ノ管領ノ事ハ
勅許有シ事ナレハトテ今度箱根相摸河
ニテ合戦ノ時有忠輩ニ恩賞ヲ行ハル先
立テ新田ノ一族共拜領シタル東國ノ所

領共ヲ悉ク關所ニ成シテ給人ヲソ被付
ケル

鎌倉大日記云建武三延元丙子直義左馬頭自今年關

東十ヶ國管領二丁斯波陸奥守家長為管

領被指置處為顯家於杉本觀音寺自宮按

義ハ全免ノ氏將軍の附託を以て關東を管領
キテ之ヲ家長ハ其ノ代官とシテ海軍を掌りし事

太平記云新田足利確執奏狀條義貞朝臣是ヲ傳聞

テ同奏狀ヲソ上ケル其詞曰中前亡餘黨

纔存揚蠶螂念之日尊氏申賜東八箇國管

領不叙用以往勅裁養寇堅息澤害民事利

欲違勅悖政之逆行無甚於焉云々諸卿重

テ僉議有テ此上ハ非疑慮急ニ討手ヲ可

被下トテ一宮中務卿尊良親王ヲ東國ノ御管

領ニ成ニ奉リ新田左兵衛督義貞ヲ大將

軍ニ定テ國々ノ大名共ヲソ被添ケル按ハ

足利殿孫東ノ左なる勅定ノ背ルヲを以テ其良親王を
東國安臥トシテ征討せられしなりされも友軍利なく

しと帰京ありまれば東國ハ云々す
足利家の爰領する所とあるも利

又云 奥州國司顯 八月十九日ニ白川ノ關
家卿上洛條

ヲ立テ下野國へ打越給フ鎌倉ノ管領足

利左馬頭義詮此事ヲ聞給テ上杉民部大

輔細川阿波守高大和守其外武藏相摸ノ

勢八万餘騎ヲ相副テ利根川ニテ支ラレ

按義詮當時弱年にして全く東國の守護ありしは阿波守と
いへども叔父直義系師より之を以てて代て關東に鎮す
ありし文藝舎爰領し稱あり次條に東國若領と記せるも
亦あらず同し又按前より引し穩倉大日記より之を斯波

家長の自書ハは時のよりなりは家長も
義詮の輔佐として穩倉を守護しなり

又云 追奥勢跡道 大将左馬頭殿ハ其比纔
道合戰條

ニ十一歳也未思慮アルヘキ程ニテモ才

ハセサリケルカツクニト評定ヲ聞給

テ抑是ハ面々ノ異見共覺工又事哉苟モ

義詮東國ノ管領トシテ夕マニニ鎌倉ニ

アリ十カウ敵大勢ナレハトテ爰ニテ一

軍モセサラニハ後難遁レカタクニテ敵

ノ欺ニ事尤當然也云々

上杉系圖云憲藤修理亮中務少輔關東一

方執權曆應元年三月十五日於信州討死

按憲藤系家長討死の後

義詮の輔佐となりしと云

鎌倉大日記云康永壬午義詮十月二日元服

十三歳此時未將軍只号鎌倉殿按本書記云

義詮今年より全く關東を治めたりしなり
或は父師よりして政務を暇たりしなり

上杉系圖云憲顯執權民部大輔越後守安

房守康永元年四月晦日管領按憲顯も亦義詮の輔佐と云

執權を補は
らん」と云

喜連川判鑑云義詮貞和五年十月高師直

師泰奢侈ニ依テ直義政務ヲ停止セラル

師直力計ラヒトシテ上京ニテ政務ニ預

ル基氏ニ鎌倉ノ管領ヲ讓ラル

又云基氏貞和五年十月任關東管領職上

杉兵庫頭憲房男民部大輔憲顯高武藏守

師直男播磨守師冬ヲ執事トス

太平記云師冬自高播磨守ハ師直カ猶子

ナリシヲ將軍ノ三男左馬頭殿ノ執事ニ

ナシテ鎌倉ヘ下リシカハ上杉民部大輔憲顯

ト相共ニ東國ノ管領ニテ勢ハ箇國ニ振

ヘリ

鎌倉大日記云貞和五己丑基氏御下向觀應

寅庚寅關東國管領高播磨守師冬十二月廿五

日没落鎌倉翌年正月廿五日於甲州栖澤觀應二

城被討了其後戶部憲顯一人管領按觀二年等持院殿

憲顯ト直義ト堂直義ト不快の時

喜連川判鑑云文和二年七月畠山阿波守

國清鎌倉ノ任執事

太平記云新田左兵衛佐古ハ新田義貞義興自害條

忠功有シ族今畠山入道道誓ニ恨ヲ含ム

兵竊ニ音信ヲ通シ催促ニ可隨由ヲ申者

多カリケレハ義興今ハ身ヲ寄ル所多ク
成テ上野武蔵兩國ノ間ニ其勢漸崩セリ
此事無程鎌倉ノ管領足利左馬頭基氏朝
臣畠山入道道誓ニ聞エテケリ
又云頓宮心 康安元年十一月十三日關東
ヨリ飛脚到来ニテ畠山入道道誓舎弟尾
張守御敵ニ成テ伊豆國ニ楯籠リ候云々
其濫觴荷事ソト尋ヌレハ去々年ノ冬畠

山入道南方退治ノ大将トシテ上洛セシ
時東八箇國ノ大名小名數ヲ盡シテ上リ
ケル此事軍勢長途ニ疲レ數月ノ在陣ニク
タヒレテ暇ヲモ不乞拔々ニ大略本國ハ
下リケル遙ニ程經テ畠山關東ニ下向シ
テ彼等カ一所懸命ノ所領共ヲ没収シテ
歎ケ共耳ニモ不聞入餘ニ事興盛ニケレ
ハ宗徒ノ者共千餘人神水ヲ吞テ所詮畠

山入道ヲ執權ニ被召仕ハ御事御成敗ニ

隨マシキ由ヲ左馬頭殿ヘソ訴申ケル基氏按

詢ヨリテ道誓ハ基氏の勳氣を蒙リ伊豆北條禰寺ヲ籠

明年九月ヨリヨク基氏ヲ攻ラレ隙を乞ヒ終ニ流死ス

又云 畠山入道道 畠山ハ此十餘年左馬頭

ヲ妹聲ニ取テ榮耀門戸ニ餘ルノミナラ

ス執事ノ職ニ居ニテ天下ヲ掌ニ握ニカ

ハ東八箇國ノ者共ノ命ニ替ラント暁ヒ

近付ケテ我身ノ仁徳ト心得テ云々

喜連川判鑑云貞治二年六月上杉民部大

輔憲顯再任執事職是ハ觀應頃惠源禪門

ニ屬ニ故將軍ノ御勳氣ヲ蒙ル其後先非

ヲ悔ヒ鎌倉殿ヘ歎申ニ依テ御免ヲ蒙リ

此度任執事

鎌倉大草紙云尊氏公々御母二位殿ノ御兄上杉

名庫入道憲房京四條合戦の時將軍以命ヲ代テ

討死シテ實子上杉修理亮憲孫曆應元年ヨリ

関東の執権を作すこれ同年三月十五日信濃國
あゝ討死其子幸松丸とて十四歳二男幸若丸
十二歳とてつらつらに師等石川入道是れ供して
總舎へ系けきは將軍大に感し兄とは左馬助
胡房と号し信濃越後とほり牙を六中替お備
朝宗と名付上総國を多しり應永二年三月
孫東の執事とて補し大懸の先祖是なり
憲房は男民部大輔憲顯は人そと氏公也

錦小路殿は兄才不和のとき錦小路殿の時より
系し由將軍は西へありしも業者才一人
おゝ関東のひき免け人よあすんハ叶はしと
思ひしれそ石出りり其上基氏公は乳母子
おゝ幼きより抱きそつて中より青く一統
ゆゑ越後安房兩國を下しこれ總舎は越後見
おゝ山の内及の先祖是なり
頼印僧正繪詞云觀應二年ノ頃將軍ト錦

按大懸といふハ
扇谷家のことなり

小路殿ト不和ノ子細出来ス爰上榎ノ民
部大輔憲顯ヨシニヲ錦小路殿ニヨセテ
城ヲ信州ニカマヘ數萬騎ヲ率ニテ武州
將軍ノ陣ニ發向ス中寶篋院殿讎敵ノ怨
念ヲ口スレテ忽ニ降參ノ御教書ヲ十寸
ルニノミナラス越後ノ國守護職ノ御教
書到来ノ間則城ヲ拂テ越後ヘ進發ス力

子息能憲道謹憲春道合憲方遺命ニ任テ知行相

續十三函代關東ノ管領相續ノ事併院主
ノ加持力也

喜連川判鑑云基氏男氏滿貞治六年五月
御家督上杉憲顯執事トシテ輔佐也應觀安
元年九月十九日執事上杉憲顯死去次男
兵部少輔能憲執事職ニ補セラレ上杉中
務少輔憲藤カ男彈正少弼朝房能憲ニ相
並テ執事ト成ル是ヲ兩上杉ト號ス朝房

ハ後ニ在京ニテ死ス

上杉系圖云憲顯民部大輔關東執權憲顯

弟憲藤中務少輔關東執權此名字始憲顯

男能憲兵部少輔關東執權憲藤男朝房彈

正少弼關東執權按一本前後皆執權と記して管領也以て人他にハ少弼と

後仍と
注あり

花營三代記云應安五年十二月廿日關東

方管領上杉兵部能憲少輔入道上洛著三條

洞院大草太郎左南門尉亭

後愚昧記云應安六年十一月廿五日今夜

被行小除目參議源義滿勲功左近中将源

義滿兼左近中将藤原冬實左馬頭源滿氏

關東管領源基氏卿息正四位下藤原宣方從四位下

源義滿正五位下源滿氏自餘雜任略之按滿氏

氏滿ハ誤り大の比々氏滿をハ涉所も公方也

管領といふものゝを記しをかく書れハ堂上此
記録ハ
なり

空華日用工夫集云永和二年五月九日兵部問以臨終用心之一段能憲畧中又兵部上表辭管領職遣余令白府君余推讓少室相與入府啓管領上表之意府君不允還就兵部宅執報以不允之意十日兵部重邀余與少室懇聞于辭職之切府君會議乃曰管領職本系于京之樞府豈敢專免當急白京府宜寬更而忍待之慰論諄下余復報以白京之意

兵部顏色稍好如平口人咸謂以脫重職其病自除也十三日入管領第先與房州和會白兵部辭職於京府次入卧内與兵部談畢叅白府君於是辭職之豈既定矣喜連川判鑑云永和三年四月十七日上杉能憲死不舍弟刑部少輔憲春執事職二補セラル

鎌倉大寺紙云永和六年三月三日改元康曆

治ノ大将トシテ數萬騎ヲ率シテ上洛ス
整伊豆ノ三島ニ信宿ス爰ニ道合管領夕
ルヘキ由仰ラル、間貴命ニヨリテ四月
廿八日還叅シテ出仕スニハ道珍自害
ニヨリテ關東野心ノ由洛中へ徹スル間
武衛^{氏滿}驚テ自筆ノ告文ヲ認テ瑞泉寺古天
和尚ヲ使トシテ將軍へ陳謝申サル、處
五月二日將軍自筆ノ状ヲモテ子細ア

北へカラサル由返事アリ三ニハ京都管
領未定ノ處ニ同日志波ノ治部大輔義將
ヲモテ其仁ニ補セララル都鄙ノ兩管領同
時ニ定リシカハ身害ノ義悉ク和睦ニ歸
ス
鎌倉大日記云永徳二^{壬戌}正月十六日道合
管領職上表六月廿七日亦還補

穩倉大草紙云明德三年四月廿二日上杉房州

道合年病レ依レ後領を辞シ子息憲孝

名代子ニ補ス
按憲孝元憲定子也今穩倉
大日記表連川判鑑子依て改正

喜連川判鑑云應永元年十月廿四日前管

領上杉安房守憲方入道道合卒ス十二月

三日上杉兵庫助憲孝病ニ依テ管領職ヲ

上表ス

上杉系圖云憲藤男朝宗中務少輔上總國

守護應永二年三月九日任管領號釋迦堂

管領十二年八月十三日辞

鶴岡事書案云就當社座不次以下涉寄進事

應永七年辰六月三日執行法下出房倫与南花坊

後譽為人管領方ハ被系尚社涉勒形不去或依為

遠國今不知レ或雖為近國依早水与換有名

無実定レ改就於代レ被定ニ涉勒号上者ニ病忘

令勤仕レ方大畧致ニ供勤行レ由被甲レ處ニ後依

由返レ子越志レ由号レ在事ニ在レ就レ以レ目安レ可有

四月末ツ方常陸國ノ住人越幡六年郎無差
罪科所帶ヲ被没収候程ニ禪秀再三不便
之由被申候處ニ上意以之外御氣色ノ間禪
秀被思ケルハ道ノ道為コトヲ悦ヒ法ニ
背コトヲ法トシテ不諫申居職ヲ有何益
乎トテ五月二日ニ上表被申畢上意連々
御耳ニ逆ル儀上意ヲ非令輕乎ト思召間
収上表畢同十八日ニ大全ノ嫡子安房守

憲基ニ被仰付

源余大草紙云應永廿四年五月安房守憲房基
ハ
いゝ思ふもん同廿八日職を辞し三河ノ下向あり
しをやうしに被仰下り是は五月廿四日鎌倉了
返り系り六月廿日又爰候子成治廿六年三月
六日上杉安房守憲基病し依り爰候成治
子息四郎憲實為職を承り安房守に任是

伊勢家記云應永卅一年十二月廿七日大

御所御方真馬ニ管領一成也管領私ニ書畠山左

衛門督入 上杉四郎鎌倉管領也
道道端

鎌倉大草紙云鎌倉成氏ハ同姓持氏一礼ニ付

永享十年十一月永壽王トシテみま信濃一

落行大井越前守持光を頼居みまトシテ同十二年

三月四日舎兄二人常陸國中郡ト蜂起ト同廿一日

結城氏朝を多のと龍城五トシテ持光ト家信二人を

逐けて六少の時結城の城ト龍城ト結城落城の時

兄才三たけ生補たけトシテ上たけりたけるを舎兄二人ハ英徳王

垂井たけれたけ金幡たけちたけトシテ生害ト永壽王後ハたけトシ

東西不覺の祈るれハ一命を助英徳のち後土波

左京大夫トあつけらたけ關東トハたけ波安房ト入道

鎌倉ト居住トシテ政勢をたけはたけりたけトシテ安子

越後のち後人上杉相模ト房定關東ト諸士ト

許議トシテ九々年たけれたけ万毎年上洛トシテ捧訴状

基氏ト雲孫永壽たけ九を以關東志たけトシテ

等持院殿に御遺命をやり京都に召しよる
るき由丹精を尽しおろし平元元年正月
山沙汰ありし永壽王殿をやりし亡父持氏に
御をよむより同二月十九日關東へつりしおれよ
より上杉に御すべ誠後上野の境へ出むる政事を
輔佐し同顯定ハ上野國府中へ系還法のお支度
を弛毛申す八月廿七日上州白井をやり鎌倉へ
赴きお由せえけまは上杉安房守も沙汰す

可系と支度志るういやくは父持氏兄弟
三人より憲實を為しおをけいし子定と恨免
し思ふおれお兒子孫のつえ大事なりとん
同廿六日の夜子息三人同夜して伊豆國へ落し
爰より出家して御方志るおぬる永壽王殿ハ
同九月九日鎌倉へ還許法不造災なりし同
京都より法下知りて上杉安房守切衛を法
おれも子息二人より出家となり西田一落

末子龜若九幼少なりりまは伊豆此山家子隱
を老信と漸く尋出京都へ以由り
多し一幼少成とも老信とも今輔佐者依り任
山内扇谷此多家の少お治ふく京都此山下知を
うけ政務をせよと致し也信下左万同年十月
晦日此所出来此後なり京より西一字を下さま
永壽王及此之後ありて左馬次成氏と稱若九と
上杉右京亮憲忠と号次
按徳倉大日記只成氏を評を
蒙り憲忠執権とありり

以より文安三年一子繫下り上杉系圖より文安
四年九月憲忠執権とありしを記より其疑ふへ

上杉系圖云憲忠右京亮文安四年九月廿
五日今川播磨守帶綸旨下著享徳三年十
二月廿七日於鎌倉御所為成氏被誅憲忠
弟房顯為憲忠
猶子上杉四郎兵部少輔在鎌倉
十二年文正元寛正七年二月十二日於武州五十
子與成氏對陣中病死

御内書案云寛正五甲申職上表事此元可令

好知_レ中先度被_レ作_レ々々_レ度於_レ以_レ禱_レ退_レ之_レ者被_レ
聞食_レ以_レ右不可_レ然但例可有_レ輔佐也十月十六日
上杉_レ多_レ級_{房顯}少_レ捕_レ及_レ御_レ判

又云文正元年丙戌房顯送_レ跡_レ事_レ息中一人
領掌_レ以_レ右_レ之_レ於_レ以_レ杉_レ被_レ官人_レ委_レ細_レ可_レ申_レ以_レ也

六月三日上_レ榎_レ民_レ於_レ大_レ輔_レ及_{房顯}御_レ判_{房顯}少_レ捕_レ于_レ時_{房顯}
関东執事房定ハ
戦後_レ多_レ護_レナリ

上杉系圖云房顯男顯定四郎民部大輔右

馬頭實越後上榎相摸守房定次男房顯無

子息依_レ之_レ長尾景信迎_レ之_レ令_レ顯定繼家督于

時應仁元年也此年任管領年十四移山内

初築平井城永正七年六月廿日為長尾為

景對治越後發向雖得勝利信州高梨蜂起

於推屋討死顯定男顯實實公方源四郎永

正十二年早世按平井城ハ
上野ノ所

又云禪僧周清男憲房五郎右馬頭永正十

二年任管領大永五年四月十六日死憲房

男憲廣養子實公方源高基子四郎任管領按周清之憲實乃子

みて憲志の兄なり

小田原記云上杉憲房ハ鉢形へ來テ人衆

ヲ遣ニ河越衆ニカラ合江戸ノ城ヲ夜カ

ケニシテ取返スヘシト打立處ニ同國平

居ノ陣ニテ重病ニ犯サレ大永五年四月

十六日終ニハカナクナリ玉フ誠ニ此人

關東長者ニテ諸軍モヨクシタシニ奉リ

政道モ私ナカリニカク成玉云々扱了

ルヘキニアラサレハ京都へ御意ヲ請古

河殿へ申彼家督憲政幼稚ニシテ難叶ト

テ公方ノ御子ヲ一人養子ニシテ奉リ憲廣

ト名ヲ付奉リ管領ト定テ長尾白倉大石

小幡等ノ長者共彼名代ニ關東ノ成敗ヲ

司リテ諸家ヲ支配スル事モトノ如ク分

國ハ無為ニシテ治リケル

天正年代記云天文六丁酉上杉憲正定管

領憲廣上總退按憲正憲政

豆相記云録倉管方滅土七之後關東州國分

散而雖如戰國七雄上杉嘗奉管領職而為

州國之長號東管領執柄異他威名赫如矣

中天文二十辛亥年氏康氏政父子圍山内

則政居平居城攻敗則政出奔北越矣執則

政長子龜若丸以皈於修禪寺殺之矣永祿

三甲申年北越長尾景虎出張關東兵尋其

濫觴上杉管領則政平井城敗北之後出奔

北越謙信入之兵則政以關東管領職兼上

杉氏與景虎曰相人朝夕釋憾於弊邑長子

死之民震動國幾亡吾身泯焉故今為山莽

矣寡人示忍其詢願再皈弊邑之地而比死

者一洒之景虎與之終改長尾号上杉管領

景虎後改輝虎所謂義輝賜越永祿二己未

年景虎以回文告東八州列將曰先年東公
方滅亡之后兩上杉嘗奉管領職而八州盡
附庸于上杉矣然伊豆北條侵襲於關東恣
嚴威故諸士舉從于北條實忘忠臣不事二
君之語乎此故我起義兵而欲使則政再飯
國不君君而却事讎臣等豈忍哉亟服景虎
退北條之謀於諸將之急務也故今呈一紙

回文云依之而東八州諸士盡寒心于北
條而飯景虎景虎喜而則率越師戒嚴而發
向關東先伐沼田城取之亦拔厩橋城而圍
名和秋城自同年十月迄翌歲二月宿年而攻
城聚人衆東八州之士卒皆飯景虎猛威
益大終越師伐於相小田原云

按則政他書
憲政子紀云

と
り

東亂記云 景虎小田原寄來條 永祿四年三月上杉景
虎東八ヶ國ノ軍兵ヲ催シ其勢九万六千
餘騎ニテ小田原へ發向シ先年養父憲政

東亂記云 景虎小田原寄來條 永祿四年三月上杉景
虎東八ヶ國ノ軍兵ヲ催シ其勢九万六千
餘騎ニテ小田原へ發向シ先年養父憲政

氏康ニ折負上州ヲ落シ耻ヲモ雪カシト
披露ス後ニ聞エケルハ今度發向ハ氏
康退治ノ為ニアラス管領ニ成テハ代々
若宮へ拜賀アル事ナレハ鎌倉へ參詣シ
管領ノ悦ヒヲモ遂ニト思ヘ^{トモ}彼所小田
原モ無下ニ程近シ定テ勢ヲ出シテ合戦
ニ及ハシ拜賀モ叶フマシ先小田原退治
ト披露シテ人衆ヲ集メ小田原へ押寄對

陣シ人衆ヲ出サハ合戦スヘシ敵籠城ア
ラハ若宮へ參詣ヲ遂へシト内ニ密談シ
テ小田原へ押寄ケル云々大屋形氏康老
中ヲメサレ仰ケルハ抑今度景虎發向ノ
事ニ付テ各々手合ノ沙汰最ナリ然レト
モカノ景虎天性健ナル若モノニテ就中
憲政ニユツラレテ管領ト名ヲ付諸侍ヲ
下ニ付^レハカレラカ見ル處ヲ思ヒ

入ツヨ^クヲ出スヘシ先籠城ノ用意ヲシ
テ敵ヲ外ニナシ馬ノ足ヲツカラカセヨ
矢種ヲ盡サセヨ此方ヨリ人衆ヲ不可出
ト仰ケル^中略案ノ如ク未タ五十个日ニモ
及ハサルニ小田原表ヲ引テ鎌倉へ參詣
シ度々ノ前例ヲ尋テ拜賀儀式ヲ追ハレ
ケル此拜賀ト申ハ頼朝卿治承四年十月
當宮ヲ建立アリシ後代々ノ公方管領京

内裏ハ程遠ケレハ此宮へ參内ニコト
ヨセテ拜賀アル當社ノ御本地ハ應神天
皇トテ仁王十五代ノ帝ノ御廟ナレハ則
禁裏仙洞モ同御事ナレハ也今度モ前例
ノ如ク山内殿ニカリヤヲ建ツレヨリ大
石長尾白倉小幡等ヲ近侍ニ乗サツレテ
宮寺へ參リ拜賀ヲ遂諸院家衆ニ所領ヲ
イタシ悦ノ酒モリシテ飯ヲケル其後其

年五月北國ヲ通り上洛シテ京公方光源
院殿義輝公へ出仕ヲイタシ關東管領ノ
御教書ヲ賜リ朱柄ノ唐笠同御紋ノユタ
ニテ御免アリ御諱ノ一字ヲ被下輝虎ト
改名シテアシロコシ状ノ裏書ヲ御免ア
リ越後へコソハ飯ヲ玉フ
越後國弥彦社所託上杉輝虎願文云輝虎守
節固不致罪事一關東ノ年ノ成御御禮

事之上杉憲政^官東管領与棄依之太初及其後

事

按源信天正六年三月辛巳同十年
泷川一益管領之分系之間不藏中絶セリ

鎌倉年中行事云管領子息兄弟出仕之時

被遣御馬ニハ御使御馬牽事先規ヨリ無

之被座職時之禮儀也管領職ハ公方様ノ

御代官ナル故也職上表之時モ先管領ト

中間禮儀同前也

又云公方様ハ管領外様出仕之時御盃御

禮ナシ自礼モ無之御座ニ疊重ナレトモ

管領ニ御對面之時御下アツテ御對面ア

リ外様奉公同前

長祿以來申次記云正月十日白鳥一進上レ

判門田毎年今日關東管領上杉雜掌式日ハ
多也○按本書判門田を多クテ長祿ト云

去波家圖書云管領職ハ昔々賞斂ハ何カス

然ナリ高師忠師泰等謀叛其後清一族

爰仍職小多ク依テ之以來賞斂ハ職ト

なり近代侍不をハ賞就とせ又關東北邊領事
分と上杉なり是は格別事と上職に准る

東亂記云 武田一門 去程ニ信長公子息信
被誅條

忠卿ト相談ニテ今度討取處ノ國郡ヲ皆
悉ク大名トモニ充行上野國ヲハ瀧川左
近將監一益ニ給ル是ハ關東ノ管領トシ

テ以來連々小田原ヲモ可亡トハ内意ハ

見エケル

又云 瀧河合 去程ニ瀧川左近將監一益ハ
戰條

上州三ノ輪ノ城ニ居住ニテ追捕使ニ成

テ東國ヲ管領ス

織田家譜云天正十年二月廿三日信長召

瀧河左近一益賜上州一國并信州之佐久

小縣二郡且告之曰以汝為關東管領職自

是以東八州到奥州征伐訟獄皆可取汝處
分下式並一送顯王御子園并計備之
松原自休手錄云瀧川左近將監賜關東管
領職在上州厩橋折節近邊ノ諸將來話ス
殘置長嶋杉山小介來テ告信長薨則對客
談之各變舊約更無恨可返人質云々諸將
ノ曰ク信長被宥對敵罪賜或本領或新恩
今以不可有疎意云々然處ニ從小田原氏

直率率三萬餘騎出張ス瀧川以三千戰之二
ノ軍打負引入厩橋六月廿八日敗武藏野
諸將ノ曰ク爰ニ有居城可勵忠信有上國
可送届云々瀧川為吊軍請可上依之送真
田真田出向送未曾從之飯長嶋

按ク免等持院殿關東共管領ノ補セ
られ一々朝廷に命じり下り一々武家此
設け一職ノ可ク守りて幾程カク等持院殿

これ以て直義に侍りて直義のまゝに宝篋院殿に
譲り宝篋院殿又チ基氏に譲られしハ、
是も武家の私にして公家此志ありしを
承りてあつた然れども武家終に國命を執る
以て基氏の子孫に續く關東に管領なる
こと以て得たり但當時執事なるものも亦
是れを承りしものありし元來此世俗
語話に稱する所なきハ執事ハ号に以て

本義とせり然るに京都に執事其職号に
嫌ひし者も亦承りし及に關東に執事も
亦常々承りし号に用ふ爰に於て君臣の
稱乃同きを厭ひ基氏の子孫に續く關東
爰に其号に指し悉く京都の制に效む
或は亦承りし又は亦承りし俗間ハ
關東將軍と稱するものありしを承りし
管領の号ハ全く陪臣執事ハ稱する所

始先等持院殿関东を管領せしめしより
基氏の代よりいづるよりハ斯波畠山より上杉ふと
一門家人の別なくハ職ヲ任用せしめし
貞治中上杉憲顕ゆきふふ礼ヲ補任せし
より以後他姓の人又ハ職ヲ拜するこゝなく
上杉一家の世職となまり上杉氏ハ管領と
なりぬき家多流あり一を山内といふ憲昭ハ
子孫なり一を大内といふ憲顯の兄憲茂の

左

後
兄なり

山内大内共ニ徳金ハ比名あり
各居館のちる不を以て稱せし

ハ有家互ニ

ハ職ヲ補せしめしより一應永中憲孫忠孫
氏憲を代起して一門ハ珍滅を致せしより
山内家とより管領ハ職を施衣ぬらふ事と
ありぬ 世ニ我々山内扇谷有家を以て有管領と
いふハむきことなりこれ全く有上杉中
稱せしを誤りしより扇谷家
してハ前後有補せしめし 数世以後山内
憲政家運衰ふるに及る其片長尾輝虎を
其子として其子代傳して一輝虎卒して

後上杉氏遂に職を失ひ織田信長更
泧川一益を以て職に居らしむと以て
戦國にして古くは領の治刑を施す
信長薨して一益本國に歸るの後
職終に事なるべし

武家名目抄第九冊

